

école de paris COLLECTION 安保商店所蔵作品

20 世紀初頭、芸術の中心地だったパリには世界中から画家を志す若者が集いました。彼らは“エコール・ド・パリ（パリ派）”と呼ばれ、同時代のキュビズムやフォービズムなどと呼応しながらも特定の様式は持たず、それぞれ独立した個性的な表現を花開かせて、新しい時代を切り開いていきました。

当社の絵画コレクションのなかからエコール・ド・パリの作品を中心にをご紹介します。

解説協力: なかた美術館

なかた美術館 学芸員 国近有佑子

信濃デッサン館 館員 沓掛伸彦

〔用語解説〕

バトー・ラヴォール（洗濯船）

以前、モンマルトルでピアノ工房として使っていた場所をアトリエとして提供していたアトリエ兼共同アパート。

ピカソ、ジョルジュ・ブラック、ドランらが住んでいた。

サロン・ドートンヌ

サロンとは「フランス芸術展」を指し、美術アカデミーの会員や、美術学校の教授らによって形成される審査委員会によって行われ、概ね保守的かつ年功序列的な審査であったが、それに反発してつくられた展覧会。

アンデパンダン展

サロンの審査が極めて厳しかったため、会費さえ払えば誰でも自由に一定点数まで出品できる無審査、無賞を原則とする展覧会。

レジオン・ドヌール勲章

フランスの最高勲章で軍事上あるいは文化上の功績者に授与されるもの。1802 年にナポレオン 1 世によって制定され、5 階級に分かれていた。



マルク・シャガール (Marc Chagall) 1887-1985

1887年ロシアのユダヤ人居住区に生まれる。1911年パリに出てモンパルナスの共同アトリエ“ラ・リュージュ（蜂の巣）”に住む。1912年アンデパンダン展、サロン・ドートンヌに出品。1941年第二次世界大戦によりニューヨークへ亡命。1947年パリ国立近代美術館で回顧展。1950年南仏ヴァンスへ移住。この頃から陶芸や教会のステンドグラスを手掛ける。1964年パリ・オペラ座の天井画を制作。

にわとりと花束

Marc Chagall

テンペラ・板 / 609mm × 495mm / 1978

敬虔なユダヤ教徒の家庭に生まれたシャガールは、生涯にわたり故郷の風土で育まれた神秘的なイマジネーションをもとに制作し続けました。この作品はシャガール最晩年のものです。ニワトリは幼い頃の身近な動物で、そのニワトリに包み込まれるような恋人たちと故郷の町並み、色鮮やかな花束、右下にはキャンバスに向かう自画像も描かれています。シャガールの追憶と愛に満ちた理想の絵画世界が表されています。





モイーズ・キスリング (Moïse Kisling) 1891-1953

1891年ポーランドの裕福なユダヤ人の家庭に生まれる。1910年パリのモンマルトルに移り、共同アトリエ“バトー・ラヴォワール（洗濯船）”やモンパルナスに居住。1912年サロン・ドートンヌに初出品。1914年アンデパンダン展に出品。第一次世界大戦では外国人部隊に志願。1919年ドリュエ画廊にて個展。1941年第二次世界大戦により米国に亡命し、1946年帰国。1953年カーニュのシャトー＝ミュゼで個展。

百合の花

Moïse Kisling

油彩・キャンバス／560mm × 460mm ／1937

キスリングは濃厚で鮮やかな色彩とつややかな筆致による画風が特徴で、エコール・ド・パリを代表する画家のひとりです。セザンヌやキュビズムの理論にも示唆を得ており、背景の矩形やテーブルの形にその影響が見られます。花や人物の背景に幾何学的な図形を対比させて、モチーフの印象を際立たせる構図はキスリングがよく用いたもので、画面いっぱいに描かれた百合の花には輝かしい生命感が満ちています。

若い婦人

Moïse Kisling

油彩・キャンバス／730mm × 540mm ／ 1938

持ち前の社交性により早くから成功したキスリングは、画家や詩人たちからの人望も厚く、アトリエ街の名を冠して“モンパルナスの王”とも称されました。社交界の花形として多くの肖像画も手掛けています。この作品では背景のブルーの鮮やかさと黒いブラウスの大胆な描写に対して、女性の陶器のような肌や、どこか遠くを見つめる目、輝く髪の繊細さが際立っています。彼が描くメランコリックな人物像は人気を博しました。





藤田 嗣治（ふじた・つぐはる） 1886-1968

1886年東京都に生まれる。1910年東京美術学校卒業。1913年渡仏。1919年サロン・ドートンヌに入選した作品が高く評価され、一躍時代の寵児となる。1921年サロン・ドートンヌ審査員。1929年一時帰国し、さらに中南米などを周遊した。第二次世界大戦中には戦争記録画を多数制作し、戦後その責任を負う形で渡仏。1955年フランス国籍を取得。1959年カトリックの洗礼を受け、レオナルと改名した。

二人の友達

藤田 嗣治

油彩・キャンバス／650mm × 540mm ／1918

藤田の初期の作品で、少女たちを細長くデフォルメして描いており、同時期に親交が深かったモディリアーニの影響が見られます。一方で指先や髪、布のひだなどの描写は東洋的で、藤田が様々な技法に学んでいたことが伺えます。藤田はこの後、独自に生み出した乳白色の下地に極細の線描で描くスタイルで、パリでの華々しい成功を取めます。この作品の画面にはすでにその乳白色の兆しが見られ、画風の変遷を知ることができます。

荻須 高德（おぎす・たかのり） 1901-1986

1901 年愛知県中島郡（現在の稲沢市）生まれ。1927 年東京美術学校を卒業し、渡仏。1928 年サロン・ドートンヌ初入選。1930 年ル・スタジオ画廊で初個展を開催。1936 年フランス政府に作品が買上げられる。1940 年帰国し、新制作派協会会員となり滞欧作を発表。1948 年再渡仏。日仏文化の交流にも尽力した。1983 年稲沢市荻須記念美術館開館。1986 年文化勲章受章の直前にパリのアトリエにて逝去。



風景

荻須 高德

油彩・キャンバス／606mm × 727mm／制作年不詳

荻須は1927年の渡仏以降、約60年間パリの風景を描き続け、“最もフランス的な日本人”とも讃えられました。初期には先達だった佐伯祐三の影響が色濃く、叙情的な作風でしたが、徐々に石造りの家並みが織りなすフォルムの力強さに魅力を見出していきます。この作品においても実直な色彩と堅牢な絵肌によって、詩情と造形美が調和しています。荻須は華やかなパリではなく、人々の暮らしが息づくパリの下町を見つめ続けました。



風景

Maurice de Vlaminck

油彩・キャンバス／600mm×730mm／制作年不詳

ヴラマンクは当初、鮮やかな色彩と大胆な筆致によるフォービズムの画家として注目され、後にモノクロームを主体とした画風へと移行しました。自然が残る風景を好み、セーヌ河岸や地方の村を多く描きました。奥へ続く一本道という主題や、極端なまでの遠近法によるビジョンは、彼が楽しんでいたドライブや若き日の自転車競技の体験に共通します。力強い色彩の対比と流れるような筆致で、勢いのあるリアリズムを生み出しています。

モーリス・ド・ヴラマンク (Maurice de Vlaminck)

1876-1958

1876年パリ生まれ。ボートや自転車競技の選手として活躍する傍ら、独学で絵を描き始める。1893年パリ郊外のシャトゥーに移る。1900年のドランとの出会いや翌年のゴッホ回顧展により画家への志向を高める。1905年マティスやドランらと共にサロン・ドートンヌに出品し“フォービスム（野獣派）”として注目を集める。1919年ドリュエ画廊で個展。1925年にパリ近郊を離れ、リュエル・ラ・ガドリエールに転居。

花瓶の花

Maurice de Vlaminck

油彩・キャンバス／655mm × 505mm／制作年不詳

落ち着いたある調度の室内に、瑞々しい花束が描かれています。ヴラマンクが風景画の次に多く手掛けたのが静物画です。安定感のある構図に、鮮やかな色を効果的に用いる画家の色彩感覚が反映されています。彼が描いた花はすべて妻が自宅に飾ったもので、このほか日常の食卓なども題材になりました。いずれも身近な存在ですが、しっかりと対象に向き合い、直感に従って、その表情を豊かに描き出すことを追求しました。



マリー・ローランサン (Marie Laurencin) 1833-1956

1883 年パリに生まれる。1904 年アカデミー・アンペールに入学。ブラックの紹介で“バトー・ラヴォワール”に出入りし、ピカソや詩人アポリネールらと交流する。1906 年アンデパンダン展に初出品。1912 年キュビズムのグループ展『セクシオン・ドール』に参加。1925 年バレエ・リュスの『牝鹿』の舞台美術を手掛ける。第一次世界大戦中はスペインに亡命。帰国後は第二次大戦下もパリを離れず、制作を続けた。

夫人像

Marie Laurencin

油彩・キャンバス／460mm × 380mm ／ 1951

ローランサンはパリ生まれの画家ですが、“バトー・ラヴォワール”の画家たちと同世代で交流も深く、キュビズムを取り入れながら私的な世界を描いたことから、エコール・ド・パリの画家とされています。儚げな少女像を得意としましたが、肖像画も多く手掛け、社交界で活躍しました。モデルとなっているのはフランスの作家、翻訳家、写真家だったジョルジュ・ピュモンの妻です。淡い色使いと優しげな青い瞳が印象的です。





二人の友達

Marie Laurencin

油彩・キャンバス／650mm × 540mm／1927

幻想的な出で立ちで透明感あふれる二人の女性が、深い森のような空間のなかでゆったりと微笑んでいます。ローランサンは舞台美術や本の挿絵、詩画集の出版など、様々な物語に基づいた創作活動も盛んに行っていました。この作品も神話や物語の世界を想像させます。砂糖菓子にも例えられる甘やかなパステルカラーと黒や緑の対比は、ローランサンが1912年～1925年頃の作品でしばしば用いた象徴的な色使いです。



サンベルナール Maurice Utrillo

油彩・キャンバス／460mm × 550mm／制作年不詳

モーリス・ユトリロ (Maurice Utrillo)

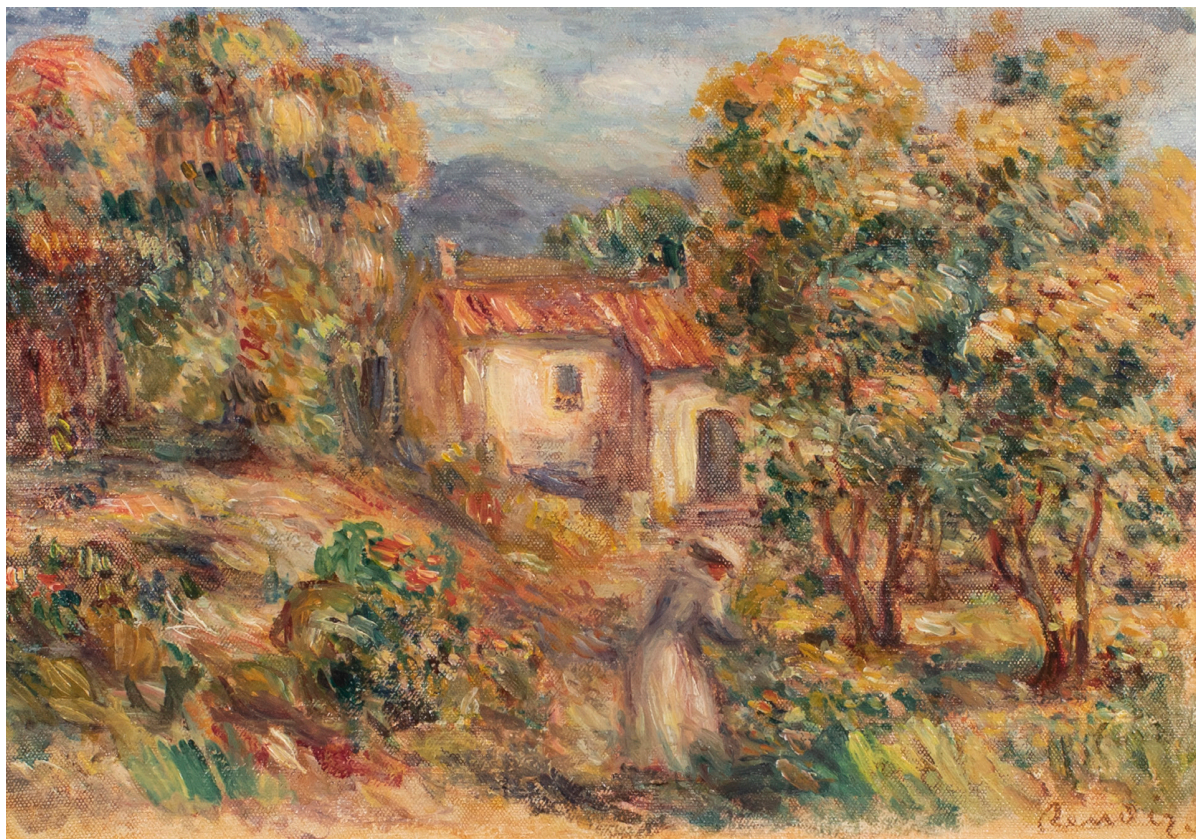
1883-1955

1883年パリ、モンマルトルに生まれる。母はルノワールらのモデルを務め、自らも画家となるシュザンヌ・ヴァラドン。孤独な子供時代の飲酒癖によってアルコール依存症となる。1905年頃対症療法として絵を描き始める。1913年ウジェーヌ・プロ画廊にて初個展。画商ベルネーム・ジュヌと契約し、評価が高まるが入退院を繰り返した。その後はサンベルナールでの療養と結婚により生活も画風も安定していった。

ユトリロの創作はアルコール依存症の治療を目的として始まりましたが、モンマルトルの街角を詩情豊かに描いた作品で、画家として評価を高めていきました。この作品では療養のために1924年に移住したフランス南東部サンベルナールの風景の中に、孤独を抱えたパリ時代には描かれなかった人物も登場しています。1920年代以降は明るい色を多く用いた“色彩の時代”とされ、当時の彼はパリで最も注目される画家でした。

ピエール・オーギュスト・ルノワール
(Pierre-Auguste Renoir) 1841-1919

1841 年フランス、リモージュの仕立屋に生まれる。1854 年陶器の絵付け師の見習いとなる。1862 年国立美術学校エコール・デ・ボザールに入学、シャルル・グレールの画塾に学び、モネ、シスレーらと出会う。1864 年以降サロン（官展）に入選と落選を繰り返す。1874 年の第一回展から印象派の中心メンバーとして活躍した。その後は再びサロンにも出品し、徐々に評価を高めて成功した。晩年は南仏カーニュに移住。



カーニュ風景

Pierre-Auguste Renoir

油彩・キャンバス／250mm × 360mm ／1912

ルノワールは印象派を牽引する存在でしたが、一時ルネサンス絵画などに学んで、より写実的な古典主義へと回帰します。晩年にはそれらを統合して、柔らかな光の描写と量感を併せ持った独自の境地へたどり着きました。1890 年代ごろからリウマチ療養のため南仏の地に度々滞在し、1908 年カーニュに移住しました。薄い絵の具を塗り重ねた芳醇な色彩で、南仏の明るい陽光や心地よい空気を余すことなく伝えています。